信玄大雲記

三編

八

へ伊13
1833
672

へ13特
1833
32

續本朝圖記三篇卷之八

目録

照子斷髮法師話

月圖

宇都豊後守光秀を諫言の圖

宇野豊後守義弘并光秀の陣押之話

月圖

信長公の本陣本能寺の圖

光秀亀山より勢揃の圖

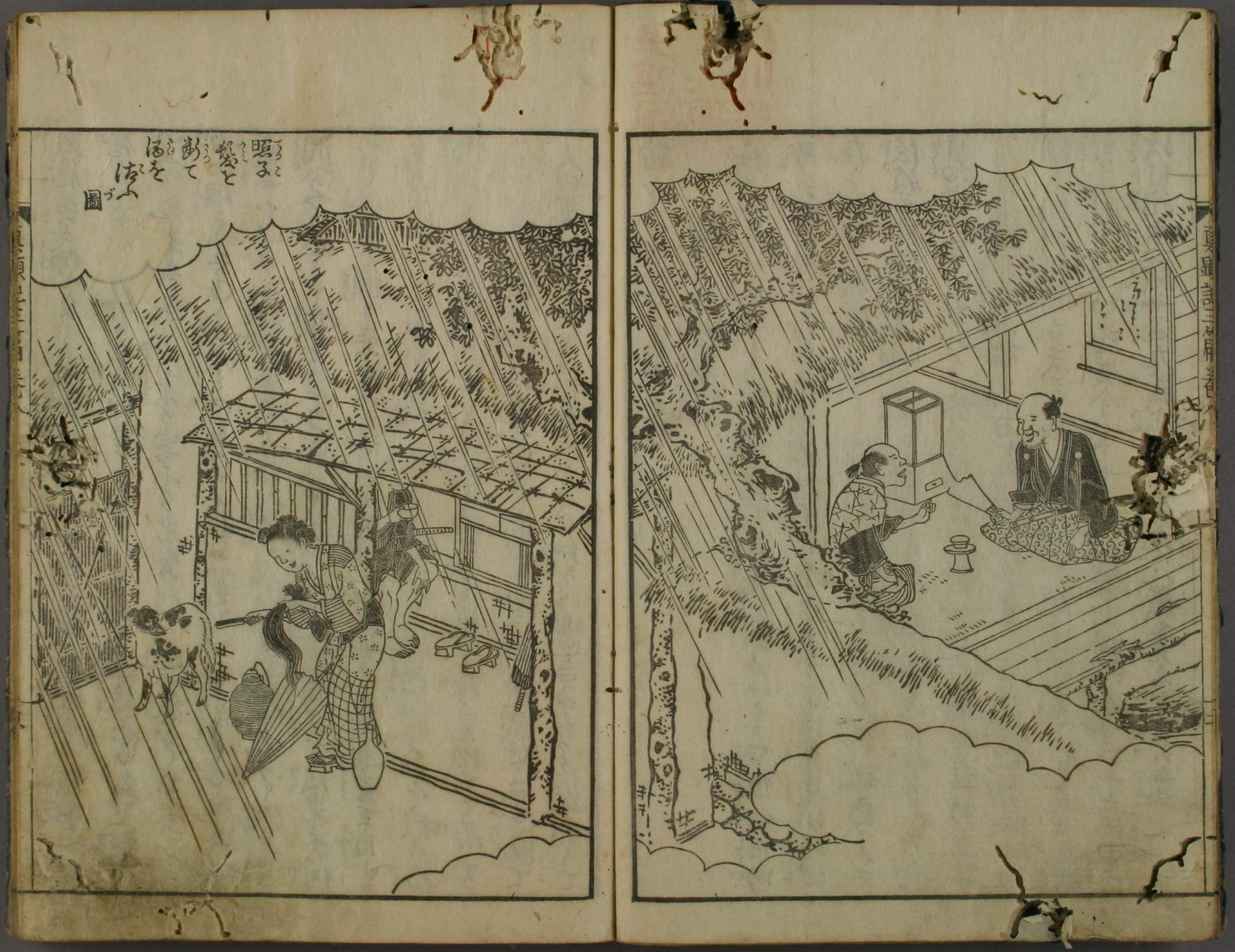
村井長門守ゑ和泉を押と見て京都へ急と走る圖

惟任光秀國本能寺を攻る圖
信長公婦女を殺して今様を舞はせ給ふ圖
光秀が本能寺を攻る圖
同日天王兵湯婦乗門を打破る圖
本能寺合戦の圖
信長公矢を射給ふ圖
矢代勝助佛を即尼湯門討死の圖
御所方の勇士討死の圖
小倉松寿丸湯浅甚次中尾源左衛門討死の圖

繪本太閤記三篇巻之八

照る斷髪法酒

家臣なれば良妻を思ひ國孔明にて良相をかりふとりや惟任日向守光秀が其日丹波亀山の城より出て京師を焼ひ大勢焼ぶ〳〵譫言して人々のをそれ光秀が狂ぶるを見て陰彼又郎兵湯惟順を除て醫療を加へ看病もるゆ一方なれば日向守三女に男あり長子は信長公の外小田氏義守信秀の大坂の城代尼湯の城を小田七兵湯尉信澄が室之其次の女は丹後の國を細河刑部太夫忠興が室と成る其次男子則十兵湯光慶今年十四歳之次は十次郎と呼で十二歳その次自殺十一歳女子九歳末子八歳之光秀が妻は妻本子


照る
祭と
鄙て
海を
渉ふ
圖

臣範賢が姉を出て国に帰り光秀は
[illegible]を出て国に帰り親類の長
[illegible]と云ふ俗なる不縁みて家を暗く住るふ妻あり名を照と
いふ或夜光秀を訪ひ来る客あり光秀何ぞ食應さくい思へども彼
夕の烟さへ立ぬる浪くの身なりしかば元といんもなるの已密
よ妻と仕ふを計る妻いと易ふ諾て出行るが程もなく酒肴と
調へうり心よく客をもてなす光秀が志を安じぬ客去て後光秀何
ふ酒肴を調へ来りしや彼計の方便なりしを云て妻言て自も
もべき方のなりしかば妻と謀て変と代をなして調へ付ひつるを彼
帽子と名しを横のさもしてぬく羅ろき髮を根より切てぞ居ら
る光秀驚て問へば彼の恐れ勝るぬ已我世を零落て
一人の妻にさへ別れ憂目をみるの何ぞ悪きのなりしやと歎て

ち絶よ飢餓の死を救ひ諸〻もよく云甲斐なくてなんもは
憐れし我い暫く此と去て何なる国を縣令にも仕へ弟〻世出身の
栄耀をなし汝が今の恐を報ひ汝い程なくして彷徨の労を勤め
二〻世三歳ろ行ごとろる道が陸奥に音信を結ひ近の人をまつ〻
婚心よりくる扶ひそして流るる〻に出ひ新倉に仕へ後信長云
て仕へて丹波近江の守といふ[illegible]ぬされば糟糠の妻忘よりも下さ
ひそいをく〻源ろうる光秀ろうる已き首日を思ひ今乃頼
逢い企てはきて貴て賜きと忘ろく着い已ろ〻に舊きを思よて
新恋を棄る着い凶〻とろや足語信長云と光秀の紀[illegible]
辺り枕り光秀比田常刀則弘松田左衛門政近三枝三左衛門
兼弘日勘兵衛兼次柴田[illegible]清門勝宗日忠義勝之天神源左門

真顕記第八

宮殿を造る
光秀を誅る
圖

國次地國徽部輝秀中沢[illegible]紅綱尾石與三忠義名の勇士と呼
で孫叛の次第を物語るべき名最と所心〻弥叛心の霊〻る実み丹
及奪国郡外に〻と〻孫と宮殿を後るとつ古あり其は得廣亟
おく循〻るるく光を[illegible]人の仲さ[illegible]り光秀丹波と外と〻る討幕に
属〻三百石の外地を安堵せり今度光秀が饗宴応の級と石〻と
劃〻四外丹波近にとも改易せら[illegible]し出雲石見の二国と揚〻と実大の驚
き光ちん光秀が我乙の期ゆらんと思ひ〻るが信光秀が考の心を考る
と四国を石〻と若命〻と地〻〻新紅の国と外べき者にあ〻べ
智勇孫賠並び武士ちんで思う〻〻く登人の石〻と踊く仁義の外
ひ晴〻れが孫叛せんも計〻と〻たあるふ物ひて伝令信長公と前尾光
討するも天行で是と撤孫ふが急滅に〻る風の末までも悪

名流さんの口惜きのち〻びやと独思ひ続〻るふ我光秀が幕
下にて若孫叛の心の外孫ふが〻て若〻と地〻て地〻と亀山の城な
る光秀に対面其容体を何ふる行ゆん物思ひ〻き都名〻て
家人名孫を強ぎ三方ち〻ぬ乱多ち〻び大抵孫叛の名と推察
光秀に向ひ〻る大守に日安に物ひく食應応の但と石〻ら信
長公のけ〻きに〻く今の四外を石離さ〻出雲石見を揚ひ〻宮ゆく
眼〻にも思ひ〻ぬ〻れ来御身の一物も〻外地後僕悪くる
君の場ひ〻るものるれびいふ石〻ら〻る〻丸家も眼〻び思ひ孫ひて大
守自勇風を石毋国と斬石〻と思ひ孫ひべ〻れ〻ば〻の道い身と殿
て若〻仕〻若〻を賞〻る小国郡を揚ひく功と殿孫ひ〻さ〻れ故
人も力と揚労と〻て其数を御ま〻功を得〻事を積で其賞を求

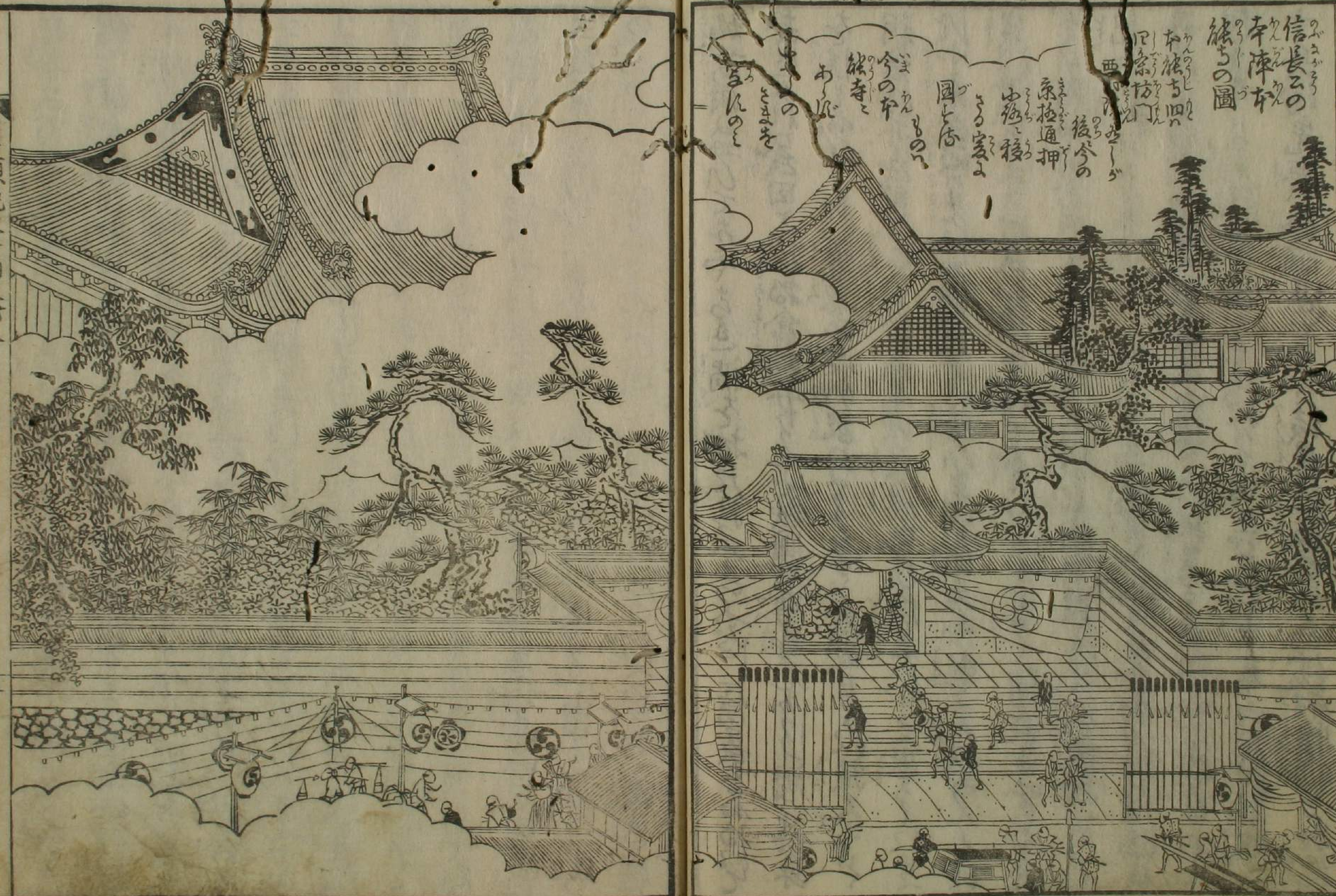
めび國を益ひんすを勢て金を廃すあんすを勢らうと大節を
論で棄へうぐるい若さを人と論語にも法孟子忘てもて忠の法心
を殺永世悪名紙法行てるみぐらびと肝膽を吐て法言に光秀
点計を返言に扨て光後守服を告く退出に光秀急ぎ氏田帯刀
をたてやるいう狂光後守我返心隠て法言に被者元素出来
く人を論ずる隠今我を体あを入ること〻ども〻他人を法を語
ぐ元者にもいうび狂と〻ぐもも気ハ計完より浅之大塩議完より崩
るこうと光後守我を一味せびず益ていうるる考ひ出来んも考ぐう
び法隠密を紛を追付て討果に勢て語るるるを上に多きび
氏田帯刀長り小者三人引ぐして飛ぶおくに退こうろう
宇野光後守完期弟光秀陣柳

枝に宇野光後守に光秀て逢てきまぐ法云に法ぐも光秀
改る名迯もちく不真て退出ぐるぶ枝も光秀出の才智もくらを
ぐに近く白尾張守大内義隆を報せも毛利の為滅に毛利家を
押ひて名に〻今ぐを安藤後伯中国防長門光秀国幽伯者出雲
石見後十二ヶ国の大守を知り天下の頭を国い其名に きをいて
光秀家を恐と殺信長を討ぎうび忍英雄侠記て一府を其家を
討に天下家を知て神て一を海万民泰平を謳び嗚呼天の命せる家
人の力を考ぐ有ぐに押ひ後けて神ぐる筋我身の上ハ人ぬ国の
後後ぐう氏田帯刀光後守が側を寄ぐと〻が接討を右の肩より
左の脇へ袈裟を懸て斬刻ぐう光後守年既を上十を余りぬまだ
只一刀を命を落を下僕信長薙者のぐに〻ぐ刀引接ぐう帯

光秀宮殿を殺害する圖

力を後援つて討て勝つ給へ法さだ切切せしぐるをとして攻めるい
を非なりる次第なり日月廿九日右大臣信長云森蘭丸門坊丸
日力丸湯浴基助令表義入毎年近江又十騎と下三百余人ゐて
上洛あひ江条西川院本能寺に後宿あつて中国羽柴筑前守へ
加勢出勢と諸国の武士と下知あり三位中将信忠卿に毎夜新又郎
毛利新助荒木九右衛門後藤平左衛門国平八郎等の近江又十騎
上下又百余人日日上京二条の城に入せ給へ信長の御末の源三
郎勝長卿国々十郎日勘下小田九郎次郎等三々余人ゐも日京
着あり御供に寄宿せらし備前の宰相と結ぶる板も信長云
洛天下の武将として千騎の手き御身を供に三百人の小勢と引連
寺院に後宿給へる泰平の世に人ども発ぶむべきなるふ説や

如何の御心ひてをやらまし備を拵て給へふとうと信長云名ねにて
越前に武田上杉朝倉浅井と敵国威勢空しなりし時の其身
を慎みて好様忍の御約束ゐるる武威日々に強大なる
朝倉浅井武田と上杉平次宗勝勢ひ微弱にして恐るに足
ず小条氏政の先に御幕下にて法ひ毛利照元今既に亡びるんとし
実に抑て天下に武威の頭を揚て手むのるく信長云ゐを足
るの嬰児のごと天下の諸士と自威を恐れて備兼墻の内に
籠り給へめさるるそうたくうき次第に枯も光秀の月月晦日
丹波一国西近江の軍勢亀山の城に弛集るの都合一万七百余人
村々実々に充満給ふ明日が天正十年六月朔日城
十兵衛光慶庵脳基ゐ後見源次郎兵衛尉惟頂と和添


信長公の
本陣本
能寺の圖
本能寺ハ四
条坊門
西洞院にありしが
後今の
京極通押
小路と移
さる寺よ
圖すも
ものハ
今の本
能寺と
あらず
其頃の
さまを
写れのと

兵卒五百余人亀山の城より注進申・国衆国の勢揃へと侍申越う
城下鉄砲烟立て水を立て結城の級の大旗を三拳白紙の紙
を撓の馬印と押立軍兵を三手にてそれ分ちろうにゆ明智左馬介
光秀を大将とにて天但馬守村上和泉守妻木主計頭三宅式部
多三郎七百余人宰乃河を渡て大江の坂をこぎ桂の里と渡り名うにゆ
い明智治右衛門と大将とにて摂国住人郡兵部少輔勢与三郎松
田左郎左衛門多にて余人五百村を唐櫃越を後て松尾山田村を
通り本陣をく寄合せんと馳参る惟任日向守光秀が明智十郎
左衛門荒木山城守日向の惣領左弾守兵内兵部奥田宮内
三郎三左衛門多三郎余人摂津守殿保津の宿より山中を通りあ
の尾の陵を余沢の見に内く紛せ尾の他人の道と法き庭

鉄の通りに出て夜笠の禁地苑流を陣せり備軍勢岩根勢
を見くに中国の出陣なりが橋廻りてそ駆くるを見るのと落い
不審多き事なくして物所の向い其様を易らべ侍大将を後に
ヤ名うい信長公仕さるい路次の後ろなりしも曲の武者押京
都にく御見物みべき旨に付一度京都へ押入ると言ふれば備軍実
さるのもとそして何心なく統度弱をよろく都近くでよろ名
宿の京都の諸国代村井長門守が知人大和川の辺に公田のみ
名うに其時所にてみろが光秀が軍勢西国へいらぶりて知よ
洛中へ打入ると様と大きの騒と急き村井長門守後を立
光秀が軍勢西国へ向ふ京都とて押寄い何様光秀謀
逆を企てい若と相見人い御用心みて抜見と告ろうに村井

光秀
亀山を
勢揃へ
の圖

村井長門守貞勝人数の陣押とゝめ京都へ急を告ぐる圖

元を尋ねて遂に何者か我君信長公に向く弓を引き矢を放ちたき
様子光秀に世を取るべき厚恩を蒙り仕置べいうでらさる逆心を企べ
きやと思ひ笑ひて耳よりとりもかけざるとて信長公の運の極めを
知るよりし時の光秀諸軍に下知して兵糧をたくひ武具を固めよ敵を
近寄せ給ふと二条の城にて仕置急ぎ来討べしと触れしかば神
妙く備へ対心なるべと心得く何れも小荷駄を拵へ支度の体喧
しく騒く雷て騒く者ども六月二日の曙明智左馬介三
千七百余人本能寺を取り囲む同じ時に京都に残る二
条の城及び妙覚寺諸司代村井貞勝堀川の館を攻め寄せ光秀
三千余人諸軍の命を受て三条堀川より陣を張り抜へ寄せ其外大陣
山科宇治伏見淀倉橋八幡鞍馬寄る〻軍勢三百人三百人の伏勢と

分ち居たり

惟任光秀闕本能寺

去る程に日暮の居を視るの如くと居時に居者をつかるの怠
のごとく居者の居を視るの如く馬のごとくと居時に居者をつかるの怠
四人のごとく居者の居ところの去馬のごとくなる刹に居の者と見るの
冠離のごとしとやいかに田右大臣信長公京都に来西洞院本能寺の
御陣を居られ天正十年六月朔日嫡子三位中将信忠卿
添三郎勝長卿御両人武日の御礼として本能寺へ入せ給ひ御茶
つと睦ごく御酒真数献ずる及び後へ入せ給ひ御茶
まつ元ちん御ふるの永き別きとうてみくと後へ被を濡しけれ
信長公犯も奥に入せ給ひ程鶏細腰の美女と集ら今後を泡せ

信長公婦女を
召して今様
を混ぜ
給ふ圖

子の魁ふるを酒宴を催しあひたるが何の用心もおはしまさねバ金瓊脈
の裡にハいせかひ鴛鴦の衾れ下に珊瑚の枕推遣て美婦の玉臂付
により添ひ臥給ひたれバ近士小倉の面々ハ次の間まで宿するりしに
東雲に近き比信長公目覚給ひて宇外に怪しや遥の人馬の
足音大地を震動数万の軍勢寄来ると思ひされバ誰かあると云ふ去
二百れなる小森蘭丸飯川宮松小川愛平ひとまで信長公給ふる
小倉どもは未だ夢をうけ軍兵数多押寄たる音静に遠く今ハ近よ
寄りて来るを見る人何者なるぞと見ん庭け来りしと給ふる森
蘭丸宮松愛平等る長く刀を携手燭をとりて縁側に立出て四方を
急度伺ひとまで明ゆく空の朧に我やらんしたる人馬
の足並并攻の声次第に近付ハ蘭丸大音上て寄るるハ武ねか若ぞ

押寄しよ何者なるぞ推参なりと呼はれど軍馬の音弥近く八門
外にやまのなるらんと見へたれバ宮松愛平侍とも手に観よ張上て四方
を遠に見たれバ東の角まで数千の軍兵本能寺を囲が
け潮のおとく押寄ける蘭丸観の下より旋の紋ハまぎるゝ何者の
寄来るや宮松とくと遠見して旋ハ水色に桔梗の紋疑ひ人ハ惟
任光秀と蘭丸驚き奥御殿へかけ入バ信長公長刀提げ御次の間まで
出給ひ我を寄る者ハ誰なるぞや蘭丸申しは惟任光秀にて備ハなる
き次第なりて一矢射て腹切し防げよや若者丸と寺中へ打着く大音
上て御下知あり長刀おし捨弓と矢つがひ待給ふ蘭丸は屋刄のなかにまる
おもく戸を溙子唐紙踏開き板敷をも力足して踏ならし主君のおん
知合ひへ逆臣惟任日向守御首を討へるぞ防げやくと呼まって

光秀
寺
を囲む
圖

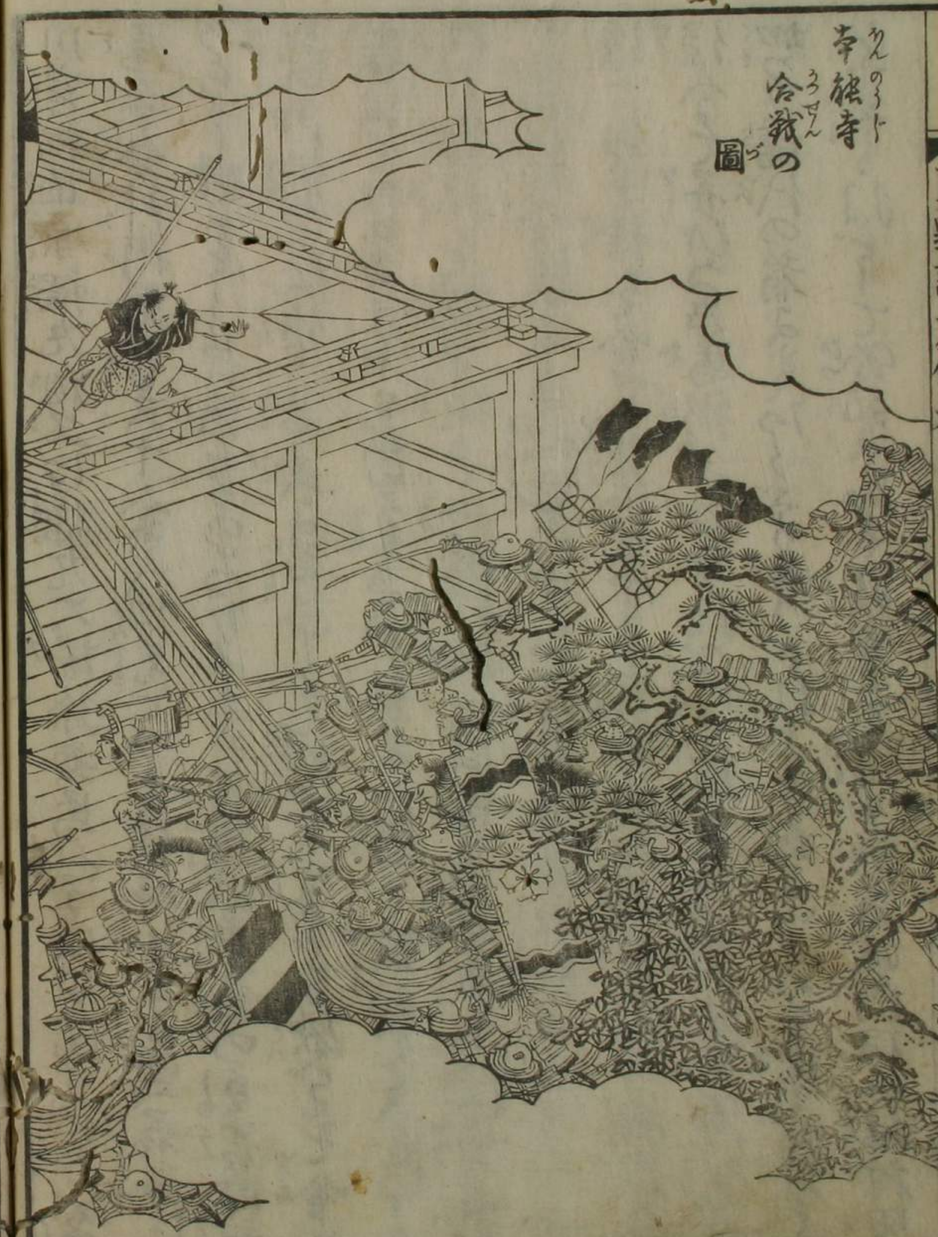
十文字の槍を引ん立て掛かりの踊出てもの凄き敵をもとめ[illegible]い来り多勢なりし
戦ひ之此時寺中の軍勢三百余人とうや惟任が叛心なりて大軍家に押
寄るぞ一世の大事と附小者よりまで日頃の恩義を報
ぜんと我勝く進と得物くを追立て用ゐる人数を[illegible]も怒る
[illegible]なく門を出[illegible]く結ひ[illegible]い勇き[illegible]くして[illegible]味方
[illegible]の[illegible]れば落く素肌なる[illegible]其働き[illegible]自左[illegible]れば
[illegible]語の寄る三百余人甲冑に身をかためて[illegible]十信の大軍[illegible]
敵勢[illegible]れや[illegible]歸の渡車より欲とる心地して[illegible]きる[illegible]限り[illegible]此時惟任
[illegible]軍[illegible]寺門の際より抽寄[illegible]ん[illegible]
寺中の兵卒[illegible]せ[illegible]と槍長刀[illegible]て[illegible]
く進と得[illegible]と寄る[illegible]遣[illegible]

清せ年十九歳大力安双の若者なりしが例よりあるる走太刀の大長刀
[illegible]両[illegible]げ門の扉に打付[illegible]れが此門忽微塵[illegible]
と[illegible]く惟任勢[illegible]門と[illegible]
兵[illegible]
の遺間[illegible]の奥地[illegible]
信長公[illegible]の矢来[illegible]
[illegible]の[illegible]矢をもげ鄙の[illegible]
[illegible]の軍兵信長公の寄る御座[illegible]
[illegible]と[illegible]信長公の眼を[illegible]
[illegible]
[illegible]

毘沙天の兵隊
楼重門を
打碎く
圖

けらしゝ引とゝ白ゝ七八間一度ゝどゝ退くうるけるのたゝ
明智左馬介光秀山形勢を遥ゝ見まくきたる者ゝ信長と
見まくびり組で討まゝ進めやゝ兵ゝ〻と来配おろうを知と敷
にて三宅孫十郎業地其忠九郎木村治郎右衛門並河金右衛門
中村治郎兵衛已上天人兵衛忠三百余人どゝ〻嘆て討てうゝ信長
弓矢おつゝび三人張ゝ十三張箭ゝ信村孫ゝ先ゝ進ゝ武者十
騎計たゝゝと村側さし竟矢ゝ矢ゝ矢ゝうゝうゝ此時合戦ゝて本軍ゝ
みゝる也宿の侍矢代勝介健を郎右衛門尉ゝ正林村田吉君御中間
ゝ長九郎長八岩新六義市孫六熊弱若虎若小鹿ゝ森蘭丸
同助九郎坊丸小川電平金森義入奥住左七今川孫治郎狩野
九郎薄田与八郎長合小八郎佐義長ゝ〻利兎松山田孫右郎飯

川宮松柏原福丸祖父ゝ孫孫丸大塚孫兵衛馬ゝ〻ゝ一郎平
尾平介弁阿弥等ゝ十余人切先とつゝ孫拝先を並ゝ君御
ゝらゝ附ゝそゝ居ゝ乱ゝるのゝるゝふゝゝ信代を悪ゝ君御討
乱の御供ゝゝゝ進ゝ忠義ゝ勇ゝゝ切ゝゝ実ゝゝ厚ゝゝ合ゝ
塵ゝたのゝゝ義ゝ手きゝ盛ゝ〻辞敬を入ゝゝ
得を破ゝを制ゝ流ゝ汗流ゝ血ゝ血で衣を浸嘆ゝ
て戦ゝゝ給ゝゝ敵ゝ勝ゝ中ゝ矢代勝助奥之惟任方三宅
孫十郎と槍を合せ稲妻のゝゝ実合ゝ此矢代勝助奥ゝ
組ゝて義ゝ手ゝ馬ゝ上ゝ信長ゝ正ゝ応御供ゝ
加ゝ藩代の者ゝもゝゝゝ長ゝ〻ゝ義ゝ勇ゝ
ゝ〻ゝ戦ゝ敵ゝ健ゝ郎ゝ正林村田



東福寺合戦の図

右衛門尉をとけ勝助が人に異なり討死をとるに及ぶ間落よ〳〵ゆく
ゆくれども耳にも入ず踏込〳〵戦ひ三宅孫十郎が槍の穂
さき三度計おれさうにざ組んと大なと廣げ三度に勝助も鎗投
捨引組て落ち合ひが此時佐右郎左衛門に藁地甚九郎と切先か
出を出す戦ひるが勝助を助んと甚九郎が切込を力と右の方へ逃
〳〵ひ廻り走り寄勝助と組合孫十郎が脇より肩へかけハ
九寸切刻さう藁地甚九郎後で跳よる右郎左衛門が肩先より
袈裟にかけて討放ひを矢代勝助が頂く孫十郎を向へ跳
側〳〵右力を引抜き藁地甚九郎と切てかう矢代ちに戦るが
おれて両人ともに配とうろ元と討死のはじめと心て利遠て
記とるもあり或い討死又い討欲も味方も励まあひ生死と拳

又ひるは小林村田右衛門ぐ〳〵戦い敵を討ぬ敵を知ぬ
右方も力もおれて小林に又天の兵衛と討ぬ右衛門死軍の中に
切死と此時信長の小性小倉松寿丸湯浅甚助中尾源右郎三
人は所屋の宿みなるが此騒動を聞て甲冑を固め打連てうけ
来り者の妻者も心えなく寄団へんと思へども唯任が軍勢雲
霞のごとく集りて入るが中うも寄ろる時よまるの大将丸馬助
光義来配ろう三鞍笠のびとう大者よりと知ろい玄関警ぐ
若芸のみ模様信長の矢を射させる間〳〵まて矢を合せよ此者
中の湯浅ろうる勢こも素肌の兵士何程のものん進めやくと
知とほるで家の矢を以て励まさ仏門の関を作り湖のごとく寄
さうろる小倉湯浅中尾の三人此中を門外へ出ぬ扱いまぐる

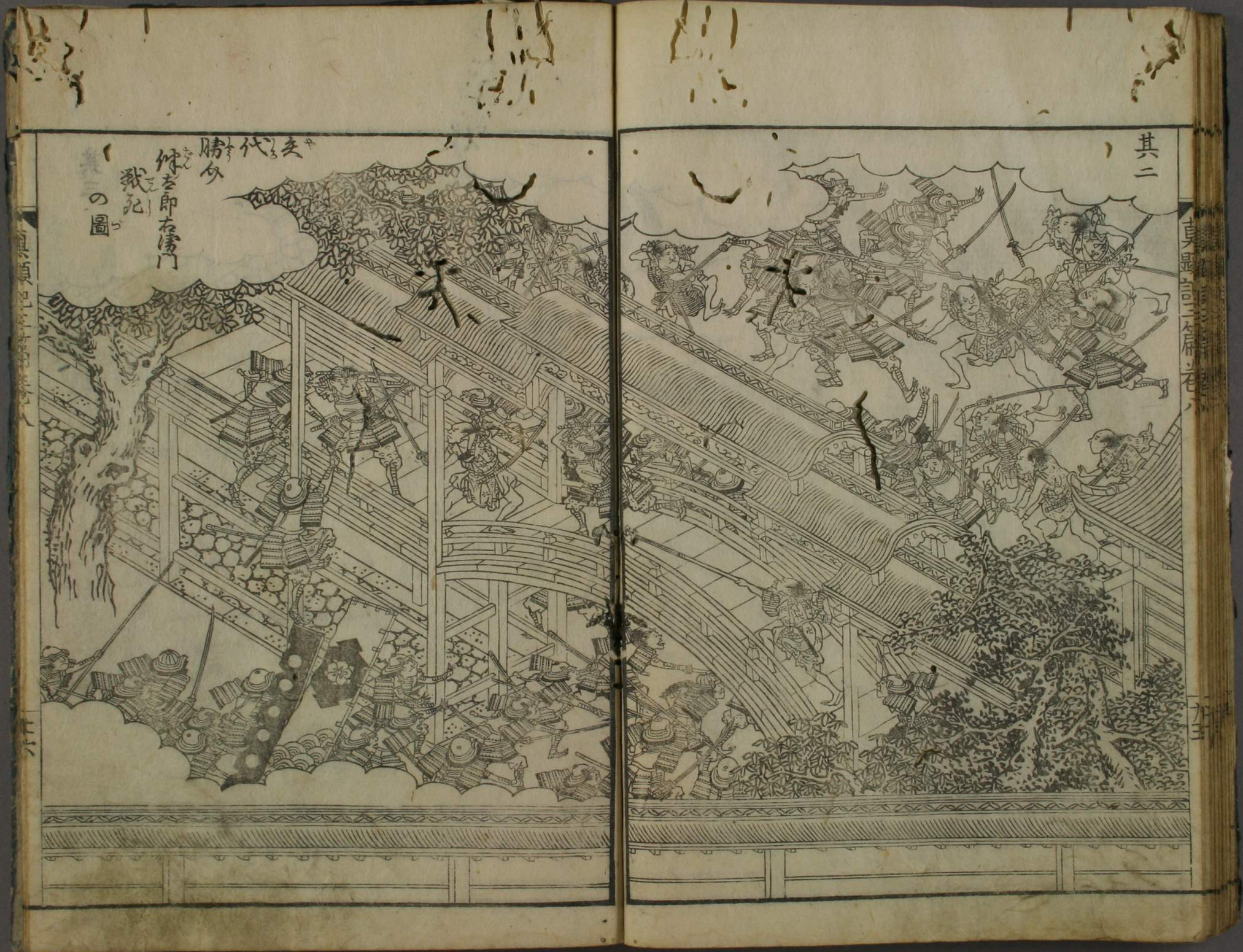
若意なく名を故ち張ふと笑へうり面々の大和い明智左馬介る
で近寄て切殺さんと三人寄く支度小倉松寿丸湯浅甚助中尾
源与郎異途の合着討死の儀せよと呼び揚つまて左馬介切て
うれを左馬介が従者三千余人繰き寄ぐ三人を中より五囲に方
ろ討てうれを右にあてう左より内に十七八騎筆を
孔して切倒せば惟任勢大より繰き強ぎ小田の軍乗味方の勢み
後を焼ぐ程に断て不覚を取ると思て左馬介大う
怒り安田作兵衛いるきう甚浦左内義れみ合さぬう古川九兵衛山本
三九郎門名五合被名と討るも味方の強勢を強めよと頻て知を
あうろう此に人い光秀が義者の勇士うて二すに天と呼きつ同る
戦場うて同さまきる名人の比類を無ならざる一人面々の義者

うて光秀がなえを股肱うれが左馬介を若源信長を討りしたき
義での軍配を左あるを強き兵先なれば左馬介が知を交争潜しも
狂強とべき安田作兵衛一番に進と出向を先と見くみば湯浅甚助
小倉松寿丸中尾源与郎三人辞欲を事ともせば東西切殺南小
一退まくて一道の無路を開き左馬介が旗本一文字に切入う安田作
兵衛悪き敵の紛れるいで物見せんと大身の槍を打振て中尾源与
郎が合指戦ふと見へしが安田が勇威まして甚助源与郎が
綿嵩を点一突に突通をつて者を五世間に甚浦古川山本
の勇士湯浅甚助小倉松寿丸と合猛虎死生の戦まぐく左遠
弛ちぐひ指が後討合が甚助松寿丸勇と合へども元和より敵の
戦ひ力労を絶に寄て討を一方去後に寄内人迫寄の兵ども

強勢の戦ひ申すこと弦をきりしてゐ人〻る代家来より信長公の御側うて
息継居うし森蘭丸十文字の槍打ふり呼て突出さい坊丸
力丸引く引を追ふて蘭丸が左右になりしび槍脇をたたき戦ふ全
森義入為田与五郎大塚弥三郎日ゐ市平尾平次魚住勝七小川
半兵衛合小八郎山田弥右衛門今川孫治郎等数刺戦ひ疲数多
負ぬ迄ど蘭丸が勇気を励ましの内うち方を踏出再び敵と退ま
くれば惟任方の勇士に日天但馬守日ゐ兵衛松本八郎右衛門村上和泉守
妻木主計頭三宅式部進士六郎左衛門等ま始めと信長疲労にゐるまで
喚き叫で責ゐる波打波のごとく殺〻くも中こゝいん方ふて
ゐるゐる蘭丸八方ゐ眼を配り強き味方ゐ助け進退出没所を
突ひび白信長の前面を突甘んと戦へ日ゐ天ゐ兵衛蘭丸が勇

戦心うしと槍ゐのべく投突ゐ敵ゐ人と成ゐ者と森力丸ゐ見ふと
三人余りのを力おふりにゐ夫ゐ討てゐ敵ゐ兵衛ゐ蘭丸を討ゐんと進
む力丸ゐ夫ゐ心如ゐ雷の落ゐ如ゐ喚きく力丸ゐ海ゐ合ゐ
力丸此勇勢ゐ神ひびく力法丸もてゐ人ゐるふぞ坊丸ゐを見て面
の敵を討捨て撲槍ゐ突ゐ兵衛ゐ勇をゐるひ二人をおゐに
戦ひ力丸を一槍ゐ突伏ゐ坊丸ゐ惟任方の兵士数
多ゐけ付中に死ゐ切ゐ蘭丸ゐ二人の者が討死を見ゐ信
長ゐの御前をゐ〻〻て寄来ゐ敵を羅刹衆鬼を踏ゐ此間ゐ信
長ゐの小扈近ゐ馬ゐ乗ゐ為ゐ人ゐ討死御前に敵と交ゐ小ゐ
小川半兵衛合森義入特殊ゐ九郎作義ゐ人〻ゐ利兵衛松村原猪三郎
針阿弥森蘭丸ゐ雑兵作ゐ三十余人皆捨身ゐ朱ゐ深血をゐ川

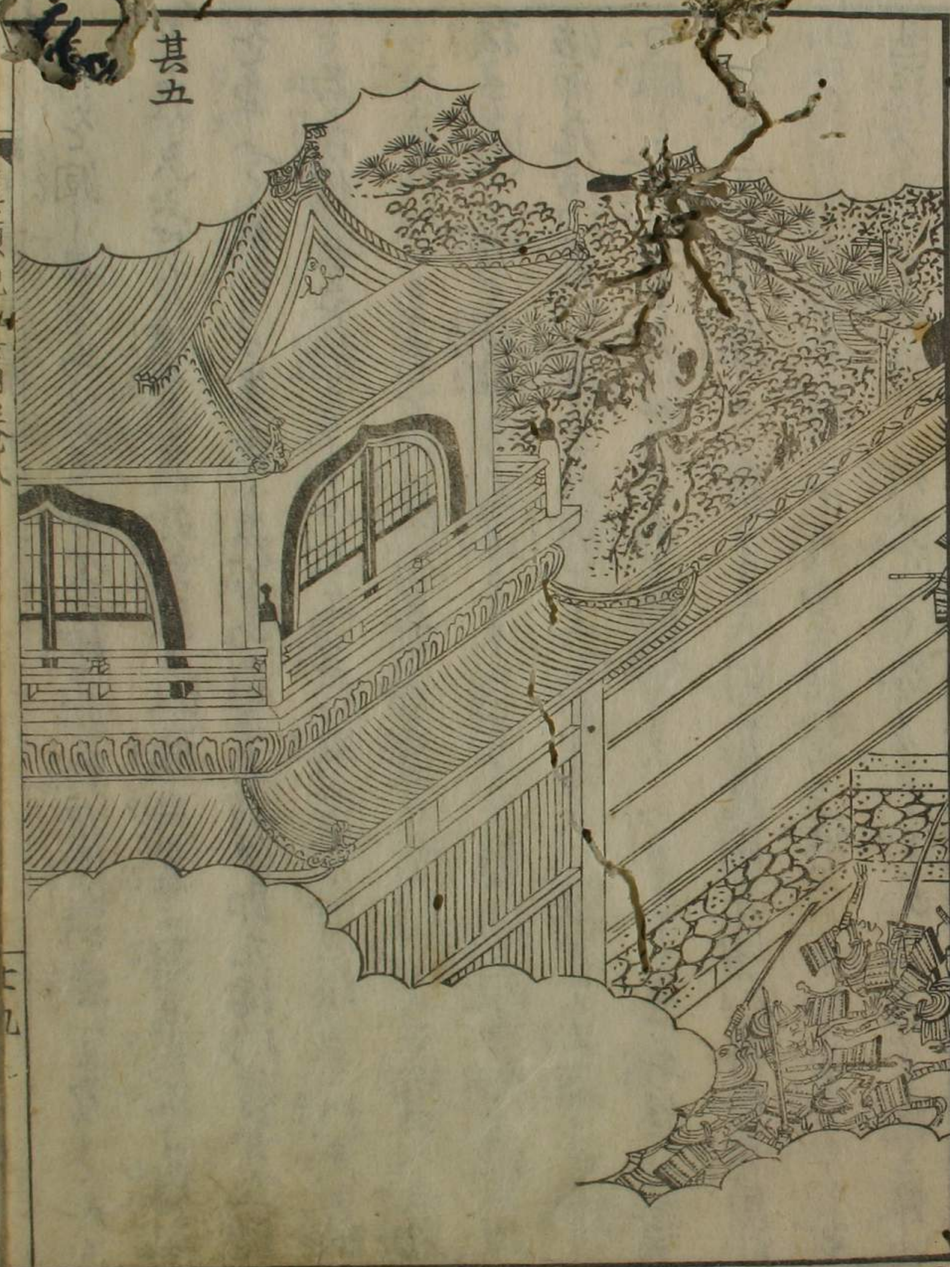
信長公自ら矢を射給ふ圖


其二
夜代勝久
俣左郎左衛門戦死の圖

其三
御所方の勇士
討死の圖

其四

小倉松雪丸
湯浅甚内
中庭源左郎
等討死の圖



[illegible]を洞〳〵あをうつて向ふの横手や[illegible]羅道の者[illegible]をたゝんと
[illegible]もいぶせ[illegible]次第之其外討殺さるゝ雑兵家々辞世彼不可辞記
を筆〳〵さく戦ひける光秀が麾下の組頭本村治郎左衛門村井与兵衛
と名乗信長を討ちまゐらんと一文字に進み来る此時信長の御[illegible]を放
ち防ぎ戦ひける光秀御陣[illegible]村井を目当て打掛る[illegible]の大矢胸
板を射通し的ず掛側より出逆さまとなりて落てけるを知らず[illegible]本村
治郎左衛門光秀を恐れず[illegible]と上て突来る[illegible]信長大眼にて活と
白眼[illegible]御[illegible]烈〳〵く弓うてたさと打[illegible]威勢
[illegible]本村治郎左衛門丹羽長田郡
山本村の者[illegible]が軍敗して後山本村へ逃り保者とし[illegible]弓うてお
[illegible]方のぐく腰痛く絶る[illegible]くなりぬるとそ[illegible]く[illegible]挑む戦ふ

[illegible]寺の軍兵[illegible]の外より強くして[illegible]の上[illegible]
い光秀が三条堀川の本陣より左て大よ苛ち此戦ひ年の魁とゝ[illegible]
備前の後治光秀[illegible]夜に入[illegible]
者稲次[illegible]命を[illegible]明智左馬介[illegible]
[illegible]大よみ軍[illegible]対魁[illegible]魁よりいへよく信長の御[illegible]
を[illegible]今日の勲功[illegible]御[illegible]と揚げ日向[illegible]
心を肝〳〵[illegible]と云左馬介[illegible]
中[illegible]と[illegible]稲次方又郎[illegible]
秀[illegible]と[illegible]光秀[illegible]
智左馬介[illegible]と[illegible]
長[illegible]の御[illegible]安田作兵衛蓮浦大内義右川九兵

山本三右衛門邸に進んで我が御方を擧中仕候と云捨て
門内へとて進みる

繪本古圖記三篇巻之八終